父の名は。

光るメロン

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悲惨な目に遭った少年が円卓最強の息子となり、大切な妹を得て、シスコン魂燃え上がらせて妹を幸せにしたい話

目次

キリエライト兄妹 ―― 1
騎士は徒手にて死せず ―― 8
今日の天気は晴れのち嵐 ―― 14

キリエライト兄妹

「３２１……、３２２……、３３３……」

バスケットを抱えた紫色の髪で目隠れ気味の眼鏡をかけた少女が訪れたとき、彼女が今現在労いたかった人物は素振りをしていた。

今現在、木の棒で素振りをしている彼は青年であった。均整の取れた肉体についた筋肉はほどよくついており、痩せすぎずごつ過ぎることもなく、腰に剣を差している。

その彼は白髪を持ち、彼女と同様に目隠れ気味ではあったものの、左側の目を隠している少女に対し、素振りに没頭している彼は右側の目を隠していた。

これと言って中二病をこじらせているわけでもないのだが、少女、彼の妹になんとなく合わせていたらトレードマークになってしまったのも事実である。

「お疲れ様です、兄さん。今日も捗りますね？」

「やあ、マシュ。いつもご苦労。悪いな、わざわざ着替えまで届けさせて。友達と遊びたかったろうに」

「いいえ、兄さん。これはわたしが好きでしていることなのです、ですので兄さんは気にする必要はありません。これからも、しっかりと修行に励んでいただければと。このマシュ・キリエライト。兄さんの妹として、しっかりとサポートを行なわせていただきます」

素振りをやめると、青年はマシュに当たらないよう、気をつけて木の棒を投擲武器のように辺りに投げつける。数百回にも渡って行われていたにもかかわらず、異常な耐久力を誇っていたように思われていた木の棒は近くの木に当たるや否や砕け散ってしまった。

先ほどまでの異様な頑強さをただの木の棒が誇っていたのは何故か？それは、彼の持つ能力が起因する。

その能力が先ほどまで普通の木の棒を数百回に及ぶ素振りに耐え切れるよう、頑強さを与えていたのだ。

青年は妹から渡されたタオルで額に滲む汗を拭い、スポーツ飲料を口に運ぶ。ニコニコと自分を見つめている妹、マシュはすっかり後輩

が板についている。
　彼等の親が見れば感涙するだろうが、運動部のマネージャーのように気が利くように成長させてしまったのは兄として喜ぶべきか否か。
　本当ならば、マシュにはもっと同い年の少女と触れ合ってほしかったというのが本音である。なのに、自分の勝手にしているトレーニングにつき合せるようなことをしてしまい、申し訳なく感じてもいる。
　得意気に笑う様子に小さく息を吐く、妹の思いは本物のようだ。ならば、その思いを踏みにじるのは兄としては野暮、というものだろう。
　青年は所謂、シスコンというやつであった。
「なら、これからも頼りにさせてもらおうかな」
「はい、デュラック兄さん。なんなりと頼ってください」
「マシュはいい嫁になれると保証しよう」
「もう、褒めすぎですよ」
　照れるマシュ、褒めるデュラック。
　なんて日常的な光景を続けながら、デュラックはスポーツドリンクを一口。

――――今日もマシュは可愛い。
　冷静な様子で一人、頷いているとマシュの方を見る。
　よく見ると、彼女の手に傷がついているのが見える。
「マシュ」
「はい、兄さん。えっと、これは……」
「誰にやられた傷だ？」
　デュラックの声色が変わる。
　マシュを大切に思っているデュラック、彼にとってはちょっとの傷でも一大事なので、少しのことも見逃さない。
　いま通っている、なんとかという学園でも同級生の友人が出来たというのは好ましいことだが、弁当を作るために台所に立つと言った時には一悶着があった。
　兄に美味しい料理を食べさせてあげたいマシュと妹が怪我でもしないかと心配な過保護なデュラックはしばらく争った後、「兄さんな

んか知りません！」と言われたことが原因ですぐに喧嘩で音を上げてしまった。
デュラックは、父同様に女性に弱かった。

＝＝＝＝＝

物心ついたとき、少年が目にしたのは白い壁だった。
同年代の子供の多くが収容されており、名前は番号で呼ばれ、白衣を着た大人たちによって様々な実験が施されていて、毎日のように泣き叫ぶ声が聞こえた。
特に少年が戦闘の訓練で一緒になった少年は快活で同室の部屋で過ごしたこともあり、色々な話をするようになった。
いつか、必ず、此処を出て人間を守る立派な仕事に就くことが親友であった彼の夢であり、少年も名も知らぬ親友の夢をいつしか応援したいと思うようになった。
『いつか、おれと二人で一人のモンスターハンターなんてのもどうよ？闇を切り裂く狩人なんてな』
『もんすたーはんたー……？』
『おまえ、世界のしんじつってやつをしらねえの!?』
この世界には、天使や悪魔が実在しており、更にモンスターや英雄の生まれ変わりやその子孫が実在するのだという。
彼らが被検体として扱われている理由も、かつての英雄が持っていたとされていた聖剣に関わることが原因であるとされており、聖剣の話をするときの親友の表情は何処か暗かった。
『でも、きれいなけんなんだろう？なら、ぼくはみてみたい。うつくしいもの、というやつを』
その言葉に親友の少年は目を丸くした。
普段は物静かで、自分の話を静かに聞いている印象が強かったが、そう話す様子からは強い意思が見え、圧倒されるものがあったからだ。
『ならさ、きっと見れるぜ。そういうものが』
『そうだといいね』

そんな話をした次の日、親友は実験による副作用で壊れてしまった。
いや、正気を失ったというべきだろうか。どんなことを話しかけても答えてくれず、いつかの彼の夢であったという闇を切り裂く狩人の話をしたときも彼はゲラゲラ笑った。
『はっ、そんなもの、なんだっていうんだ？』
その言葉を聞いたとき、心にヒビが入るのを感じた。
それから部屋が別々になったのが原因か、そうでないのか。
とにかく、毎日に『色彩』を感じることができなかった。
機械的に実験の為に呼ばれれば答え、出向き、そして機械的に栄養を摂って眠る。
いつしか、彼も心の支えを失ったことによって、他の子供と変わらないモノクロに変わってしまったのだ。

そんな彼のモノクロの日々を、剣の一閃が切り裂いた。
『数値は安定、被検体のほうのメンタル値も異常なし。さあ、今日も神の贄となれ』
彼は、ある日の戦闘訓練に発現させた能力をきっかけに別の実験に被検体として組み込まれていた。
その能力こそ、かの円卓最強の騎士が木の棒を己の武器として使用した逸話から名前を取って「騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）」。
その能力から円卓最強の騎士の息子にして円卓の災厄の席に座ったとされる聖杯に至った潔白の騎士をその身に降ろす為、彼の身体が使われた。
なにもかもを諦め、ただ機械的に生きていくだけの日々。
それが終わりを告げたのは、突然の出来事だった。
『やめろ！何をする！』
次々と倒れていく大人たち、彼はその事実を信じられず、その身を自らの意思で起こした。
『よくも子供たちにこんな真似を！外道め！』
その男は、紫髪を短く切り揃え、端正な顔立ちの剣士であった。

その綺麗な顔を怒りで染め、刀身についた研究者の血を払い落とす。剣士は彼の存在に気づくと、すぐに近寄ってきた。
『大丈夫ですか!?』
『だれ?』
『申し遅れましたね。私はランスロット。ここでの所業を聞き、派遣されてきた者です。……しかし、酷いものだ。もう既に他の子供は……』
剣士、ランスロットの言葉に彼は察する。
――――もう、あの子はいないんだな。
少年の様子にハッと何かを思い出したのか、ランスロットは自らの剣を差し出す。それを少年が不思議そうに見つめていると、ランスロットは言葉を続けた。
『話が本当なら、貴方は私と同じ能力を持っているはず。もしも、それが本当なら』
それは、運命なのかもしれない、と言うランスロットの顔は酷く苦々しげだった。
少年にランスロットが渡した剣を握らせると、少年はその重量を確かに手を感じながらも、自らが使いやすいよう・持ちやすいよう身体に馴染ませていく。
そうすることで、まるで幼子が木の棒を振り回すように振り回すことができた。
『驚きました。話は本当だったのですね』
『ぼくを、ころすのか?』
ランスロットは首を横に振った。
そして、少年と目が合うようにしゃがみこみ、その手を少年の頭に置いた。ガントレットに包まれている手だけれども、金属の冷たさより、心なしか彼の暖かさを感じることが出来た。
『――いえ。私がお前を生かす。これも、何かの縁かもしれない。私の異名、二つ名からとってデュラックというのはどうだろう。血の繋がりはないかもしれないが、親子の印として』
『いいなまえ』

『それは良かった。では、ここを出よう』
ランスロットに抱えられ、少年、デュラックは外の世界へと出た。
それから、各地を回るにあたり、自らの能力のことをランスロットから学び、似たような境遇のランスロットの娘であるというマシュと顔を合わせる。
彼女やランスロット、そして他の人々との交流を通し、デュラックは人間の暖かさと言うものを学んでいく。いつしか、妹を守りたいという気持ちが芽生えはじめ、ランスロットへ憧憬と尊敬を抱くのだが――。

＝＝＝

「教会から来たという、エクソシストさん、らしいんです。しかも、お父さんと同じような剣を持ってました」
「なんと言われた」
マシュが教会、というとデュラックの表情が暗くなる。昔から、デュラックは教会だとか神と言った言葉を聞くと異常に反応する。
ゆるくウェーブの掛かった長髪をまとめたデュラックの顔が近づくと、マシュが途端に顔を赤らめるのだが、普段以上に血が頭に上っているデュラックは彼女の変化に気づけなかった。
「出来損ない、だと」
「マシュが、僕の妹が出来損ないだと?それに、あの穀潰しと同じ剣と言うと……、ふざけるな。神がなんだ。それで、他に怪我はないのか?」
「はい、木場先輩が止めてくれたので。……その、エクスカリバーが、どうしたって」
木場先輩、と言うと彼女の学校の生徒だろうか。
胸に何か引っかかるが、それよりも、エクスカリバーというワードが耳に入った時、木に引っ掛けておいたジャケットを羽織る。
「マシュ。その言葉が本当なら、僕は行かなくちゃならないかもしれない。だから、家から一歩も出るんじゃないぞ」
あんなものが。
あんなものがあるから、妹は怪我をする。

妹が罵られる。
誰よりも大切な、何よりも大切なマシュが怪我をすることだけは、許せない。
全く帰ってこず、マシュを寂しい思いにさせている男のことは許せない、ならば代わりに、

「我らが父、円卓最強の男の息子としては聞き捨てならないことを聞いたからな」
「でも、兄さん一人じゃ……」
「僕は負けるつもりはないさ。だって、」
父をああだこうだ言おうとも、彼のことは尊敬の気持ちは持っているから。
「僕らの父の名は、ランスロット。円卓最強の騎士ランスロットなんだ」

妹を傷つける不届き者は、デュラック・キリエライトが容赦しない。

騎士は徒手にて死せず

デュラック・キリエライトと言うのは、わたし、マシュ・キリエライトの兄です。

ちょっと過保護が過ぎてて、滅多に帰って来ないお父さんに代わって一緒に居てくれ、我が儘を言っても快く引き受けてくれる優しい兄です。

そんな兄さんと出会ったのは、かなり前のことでした。兄さんとわたしは実は同じように実権の被検体という過去があり、秘密裏に行なわれていた実験が気づかれてしまったことで処分されかかったところをお父さんに兄さんは救われたと聞きます。

わたしは、とある計画のために生み出されました。その計画の為、わたしの人生はあるのだと教わって育ってきました。

そんなとき、噂になっていたのは円卓最強の騎士ランスロットの名前を持つ剣士が研究所各地をつぶしに回っていると言う噂。

わたしがいた研究所もこの後のお父さんとなる人に潰され、兄さんと出会うことになりました。

研究所に対する愛着、ですか？残念ながら、研究所の研究者たちとはあまりお話をすることはありませんでした。彼らにとって、わたしたち被検体はモルモットも同然、モルモットと会話することなんてないといわんばかりの雰囲気でしたし、わたしからも話しかけられませんでした。

『ぼくがかならず、まもってみせるから』

初めて会ったとき、兄さんは泣いていました。

そのときのわたしは兄さんが泣いている理由を知りませんでしたし、感情と言うものをよく理解していなかったのだと思います。

お父さんは優しい表情で兄さんとわたしを見守ってくれていました。そのとき、わたしが幸せになれるようにと願いを込め、お父さんはわたしに「祝福」を意味する言葉からマシュと名づけてくれました。

それからとはいうものの、兄さんやお父さんの周囲の人から色んなことを学ぶため、たくさんの人とお話をしてきました。

そこで学んできたことと言えば、兄さんとお父さんほど過保護な人はいないということと、二人がわたしのことを大切に思ってくれていることです。

兄さんは、本を読んだり勉学に励んでいるのを好きだからと言って学校に通ってはどうかと言ってくれました。わたしの体質のこともあり、渋る、お父さんを説得してくれ、女子の制服がとてもかわいらしい駒王学園に入学することができました。

今でも、わたしはわたしのことを大切にしてくれる兄さんやお父さんのことが好きです。お父さんはほとんど家に帰ってこないので、「マシュを寂しがらせていることは許せない」という兄さんが穀潰しなんて呼んでますけど、本当は兄さんもお父さんが大好きなはずなんです。

ただ、兄さんはそういう感情を出すのが苦手と言いますか、素直になりきれないだけで（でも、わたしに対して恥ずかしがらせるようなことを言うのはやめてほしいです）。

お父さん、周りの人、そして兄さんがくれたものはとても大きなものです。真っ白だった、わたしの世界に色彩を齎してくれた兄さん。

わたしと喧嘩をすると、すぐに諦める兄さん。もっと威厳を持ってください。

女性にお父さんと同じくらいに弱い兄さん。

わたしに何かあれば、目を真っ赤にして飛んでいく兄さん。

兄さん、いつもありがとうございます。

＝＝＝＝＝

「……デュラック・キリエライトだと？」

青い髪にメッシュの入った教会のエクソシスト、ゼノヴィアは白髪にゆるいウェーブのかかった青年の名乗った名前に眉を吊り上げる。デュラック・キリエライトと言えば、かのランスロット・キリエライトの息子の名前ではないか。

ランスロット・キリエライトと言えば、出自不明の養子が二人いる

最強の剣士と言われる男だ。その娘のほうに昼間に会い、「出来損ない」と言ったが、この男は何をしにきたのだろうか？
「そうだ。僕の名前はデュラック・キリエライト。マシュが世話になったそうじゃないか」
「ふん、出来損ないの兄が何をしに来たかと思えば、お礼参りか。かのキリエライトも自分の名前に泥を塗る息子を持って大変だろう」
「……デュラック・キリエライトと言ったかな。ここは引き下がってもらえるかい？これは僕らの問題だ」
　デュラックがイライラしながら返すと、ゼノヴィアは鼻で笑った。金髪の少年が邪魔者を見る目でデュラックに返すが、そのアルビノの特徴的な容姿でデュラックが怒りで顔を歪ませると、まるで狂犬のよう。

「いいや、僕が引き下がるわけには行かない。僕の妹の名誉を汚された。それが一番の問題なんだ。僕の妹を出来損ない呼ばわりした、そこの青髪の女はさぞや勝ち組なのだろうな？……よりによって、あの人と同じ剣を持っているなんて」
「デュラック・キリエライト。まさか、君は……！」
「まあいい。二人まとめてかかって来い」
　ゼノヴィアが言うが早いが、デュラックは二人にとって信じられないものを武器にデュラックは持って戦っていた。
　照明を代えるにあたり、忘れていったのであろう古い照明である。

　それをゼノヴィアへと振るうデュラック、ゼノヴィアは持っていた「破壊の聖剣」の封を解き、受け止める。
「……円卓最強の騎士の息子は、狂戦士（バーサーカー）か？蛮族か？」
「あいにく、僕は騎士じゃなくてね。まあ、狂戦士かって言われたらそうかもしれないねえ！」
「ふざけた武器を……！邪魔しないでくれ、キリエライト！」
　木場は魔剣創造（ソードバース）で一振りの剣を作り出し、デュラックに脅しのつもりで突きを繰り出す。もちろん、先ほどのやり取りでデュラック自身

が諦めるとは毛ほども思っていないが、頭に血が昇っていたといえばいいだろうか。
　しかし、狂戦士とゼノヴィアが言うようにデュラックの赤い瞳は、まるで獣のように煌々と光っていた。三つ巴の戦いの中、騎士は徒手にて死せずでその材質を強化させ、剣と渡り合えるほどには強化しているものの、そもそもの用途が違う。
　あえなく破壊の聖剣に破壊され、金属音のぶつかり合いが始まる。その音の主は、もちろん、木場とゼノヴィアである。
「そんな棒っ切れじゃ私は倒せないぞ、キリエライト！」
「わたしもいるんだからねっ！」
　栗毛のツインテールのゼノヴィアの相方、イリナもまた封を解き、擬装の聖剣の姿を現し、先端は剣の刃のまま、槍のように形を変え、白刃を煌かせてデュラックに突き刺さんとする。
　そのすれ違いざまにデュラックは自らの右手を――騎士は徒手にて死せずを発動させた右手を突き出し、擬装の聖剣を掴む。
　擬装の聖剣の姿の変化が能力によるものと見たデュラックは騎士は徒手にて死せずで擬装の聖剣を自分が使いやすいように〝侵食〟する。
「や……っ、なにこれ……っ！」
　イリナは自分の中になにかが蠢いているのを感じた。
　その蠢いているものは、触手のように這い回り、デュラックの手から擬装の聖剣の中に伸びているのが見えた。赤い線のようなものが槍へと変化した擬装の聖剣の上に浮かび上がり、デュラックは勢いのままに奪い取る。
「君はたぶん、マシュに何も言ってないんだろうね？」
「え、まあ、うん」
「じゃあ、関係ないね」
　擬装の聖剣を奪った上での急な問い、イリナは拍子抜けした。特に関係ないね、と言ったときのデュラックの顔が良い笑顔だったので、奪われた武器で切り捨てられるのかと思えば、そんなことはなく、イリナを無視してつばぜり合いの中にデュラックは突っ込んでいった。

「武器を奪い取る力を持つ者がいるとは聞くが、そこの狂犬がそうとはな。しかも、エクスカリバーを奪うことができるとは……！化け物のような容姿、その妙な力と叩き伏せてやる！」
木場とのつばぜり合い中、そこから離れるようにして牽制の蹴りを入れた後、擬装の聖剣を身の丈以上ある巨大な棒にできないかと考えながら念じてみたところ、擬装の聖剣は槍から姿を変えた。
デュラックのイメージ通り、しかし、どこからどうみても鉄柱にしか見えない魔改造ではあるが、騎士は徒手にて死せずの能力の作用を受けているからか、赤い線は持ち手から端から端へと伸びている。
質量も変化したことにより、間合いを詰められまいと大きく鉄柱を振るったことにより、しかも、力任せであった為、風圧のおおきな風が吹く。
――このままではまずいな。
ゼノヴィアは奥の手であるデュランダルの使用を考えていた。
未だに扱いにくいので使うことが少ないが、しかし、デュラックの正体不明の能力の前では奪われる可能性もないとはいえない。
「考えている暇はあるのか!?持ってるんだろう!?アロンダイトと似た剣、デュランダルをさァ！」
デュラックは、手に持っている鉄柱で破壊の聖剣を弾き飛ばそうと力いっぱいにぶつけてくる。力では現存するエクスカリバーの中でももっとも高く、そして脳筋傾向のあるゼノヴィアとは最も相性が良かった。
猛るデュラック、赤い目と揺れる白髪の長髪とまさにバーサーカーの名前にふさわしい。髪を乱しながらも、何らかの手ほどきを受けていたのが見て取れる剣術は、ランスロット・キリエライトの指示によるものかと推測。
破壊の聖剣を大振りで手から吹き飛ばした後、ゼノヴィアは、デュランダルの封印を解いて、破壊の聖剣を手から弾き飛ばしたデュラックの懐へと突貫する。
さすがのデュラックも、騎士は徒手にて死せずを使っているとはいえ、擬装の聖剣はその特殊性から、担い手ではないデュラックでも扱

いにくいものである。
急な接近に思わず、擬装の聖剣を手から離してしまい、掴んだ武器を種類を問わずに自分が使えるようにする騎士は徒手にて死せずの効果はきれ、ただの剣に戻ってしまう。
しめた、ここは正気とばかりにデュラックの喉元を狙うゼノヴィア、デュランダルの逸話がどのようなものかと知った上で、再度、騎士は徒手にて死せずを発動させる。
手の甲の上に血管のような赤い線を浮かべ、その刃を掴んだ。
「……貴様……ッ！」
手のひらは切り裂かれ、血を噴出しながらも、デュラックは笑いながら、向けられた刃を力ずくで地面に向けさせる。
気味の悪い感覚がゼノヴィアのデュランダルから伝わってくる、これがデュラック・キリエライトの能力というところか。
「二度は言わないぞ。マシュに、僕の妹に謝れ、聖剣使い」
バーサーカーは、赤い目を光らせながら脅した。

今日の天気は晴れのち嵐

デュラックは今日も妹が学校に行っている間は家で家事を行っていた。

デュラックの仕事はデュラック個人に対し、舞い込んでくる依頼が多いため、それがないときは基本的にはオフであるので、キリエライト家の家事を行っている。

炊事以外の掃除や洗濯を行っているのは、マシュの料理の方が美味しいため、それとマシュの料理を食べたいためであり、デュラック本人は味覚に自信がなかったので料理をしたがらなかった。

『……それで、恋人はできたの？』

「急にどうしたんですか、マリィさん」

一段落した頃、時計は既に正午を回っていた。

そのときに携帯が着信したので誰かと思えば、父親の職場の同僚の女性であった。

全く帰ってこないキリエライト兄妹の親代わりであるランスロット以上にたまに家に訪れて料理を作ってくれたりしているので、彼ら二人にしてみれば母親も同然の存在である。

ただ、デュラックは彼女の年齢のことを思えば、姉として接する方がいいのではないかと気遣っているが、それすらも見透かされている気がした。

『マシュちゃんは聞いたけど、デューくんもよ。もうちょっと思春期らしい事したら？』

マリィとは、電話の相手の愛称であった。

彼女の通称とは別にある本名からの愛称であり、キリエライト兄妹ははじめて会った時からそのように呼ぶことを求められている。

なんでも、彼ら二人の父親と違い、あくまでも親しい間柄でいたいというのが彼女の希望であり、マシュはもちろんのこと親しい友人らしい友人が極端に少ないデュラックにしても嬉しい提案であった。

デュ―くんとは、もちろん、デュラックの愛称である。

デュラックは彼女の言葉に眉を吊り上げた。はて、今、聞き捨てな

らないことを聞いたような気がするぞ？
「え、マリィさん。今なんと？」
『あら、お兄ちゃんは聞いてなかったのね。前からマシュちゃんに相談されてるのよ、どうすればいいのかって。もしかして、言ってはいけないものだったかしら？』
しまった、と電話の向こうで後悔する様子が感じられる。
仕事も完璧で性格もいいという完璧超人のマリィ、彼女は主に斥候や諜報を行なっているそうだが、キリエライト兄妹の前ではどうも甘くなってしまうところがあるらしい。
「僕は初耳だ。良ければ、詳しく教えてもらえませんか？これは、親父と会議物だ。本当のことを話してくださいよ？」
『そういうところはあの人にそっくりね、デューくん。マシュちゃんも年頃なんだから、あんまりベタベタしていると嫌われるわよ？』
嫌われる、と聞いてデュラックはためらった。
マシュに嫌われるとは、まさにこの世の終わりだからであるからだ。
しばらく、悩んだシスコン兄は覚悟を決めることとした。
「程よくしてますよ。マシュに嫌われるなんて嫌だ！」
『……誰に似たのかしらね、本当に。これは他言無用よ？特にあの人には』
あの人、とはもちろんランスロットのことだ。
「もちろん。デュラック・キリエライト、秘密は護る男です」
よしよし良い子ね、と幼い息子を褒める母親のような声が耳元で囁くように聞こえる。
そう言ったことに興味がないわけでもないのだが、父親の同僚とはいえ、親しい間柄にある女性にこのようなことをされると女性免疫の少ないデュラックはたじろいでしまう。
話の内容はこうだ。
最近、マシュには学校内で気になる男子がいるという。
しかし、どうやって話しかけたらいいのかわからず、友人にも言い出せなくて身近にいる恋愛経験が豊富そうなマリィに相談を持ち掛

けたのだという。
　マリィに相談したマシュは彼女のアドバイスに従い、出会ったときは必ず挨拶をすること、時折、偶然を装って一緒に食事をすることを徹底させているという。
　過ごす時間が長くなれば、自然と異性というのは意識しやすくなるものというのがマリィの持論だそうで、マリィ流恋愛のイロハだそうだ。
『……ということなんだけど。過保護な騎士さんには余計なお世話だったかしら？怒らないで頂戴？これは、あの子がどうしても困っていたから……』
「それは分かっています。マリィさんは善意でやってくれたんだって」
　それにデュラックの願いは、妹のマシュ・キリエライトが幸せに過ごせるように、ということただ一つだ。
　あの真面目で可愛らしい妹が幸せに過ごしてくれるのであれば、それだけで家事も仕事も頑張れるというもの。自分の身を犠牲にしてでも守りたいと思わせる、そんな可愛い妹なのだ。
　鍛錬終わりにお疲れさまと言ってくれたり、料理中につまみ食いをして叱る様子も何もかもが可愛らしい。
　ああ、ついに妹にも春が来たかという喜びたい気持ちが沸き上がってくるが、それ以上に兄としてマシュが悪い男に騙されてやしないかと気になるところだ。
「相手の男の名前はなんていうんですか？」
『さあ。でも、先輩って言っていたから、マシュより年上ね』
　マシュより年上、となるとおそらく１０代半ばほどの年齢であろう。
「そうか、マシュにも恋人が……」
『ショックだった？また好物を作りに行ってあげるから、それで機嫌なおしてくれない？』
　マリィに慰められるが、デュラックはそうじゃない、と制した。
「いえ、逆にうれしくて。また家で食事会するので、そのときはあの人

も呼ぶようにするのでマリィさんも是非」
『まあ、素敵。いい子ね、デューくん。けど、来るかしら？あの人』
あの人、とはランスロットのことである。
どうやら、職場でもランスロットは非常に過密なスケジュールを送っているらしく、ほとんど会うことがないそうだ。
どういうわけか、マリィはランスロットに好意を示しているようで、デュラックはあの人にマリィさんはもったいない気がする、と思って仕方がなかったが、マリィはいつもランスロットのことを話すときが楽しそうだったし、幸せそうだった。
マシュもデュラックも、母親というものには縁がなかったが、もし母親になってもらえるのならば、マリィがいいとまで思うようになっていた。
もちろん、ランスロットの女癖の悪さを除けば、だが。
「来るようにさせます。マリィさんの頼みですから！もちろん！」
『そう、楽しみにしているわ。またね、デュラック』
そして、電話が切れた後、玄関でどさりと音がする。
誰かが帰ってきたようだ、マシュが帰ってきたならば、労ってやろうと思い、ソファから立ち上がってデュラックが顔を出す。
「おかえり、マシュ。洗濯も掃除もしておいたよ。今日のおやつはーーーー」
「やあ、デュラック。ただいま。今日は仕事がなかったのか？」
ランスロットであった。
げっそりとした顔でダークスーツにその髪と同じ濃い紫色のネクタイをしており、切った張ったをしていると聞いていなかったら、職業はバーテンダーと名乗っても違和感はないだろう。
「珍しい。いつも帰ってこないくせに。マシュが寂しがっていると分かっていながら」
マシュが寂しがっている、と聞くと父の胸に何か矢が刺さったのが見えた気がした。
「そのマシュのことなんだが、好きな人ができたのは本当なのか？息子よ」

「娘のことは名前で、息子のことは名前で呼ばないのか」
「本当なのか、デュラックよ」
訂正。
父は息子にもそれなりに甘かった。
「そうだよ。マリィさんから聞いたの？あ、今度、また家にマリィさん呼んで食事会するから予定を開けといてもらえない？お礼がしたいんだ」
「お前は本当に私に似てきたな……。気をつけろよ？ところで、なぜ、彼奴の名前が？私が聞いたのは彼女ではないぞ」
となると、とデュラックの頭の中で一人浮かんでくる。
こういった話が大好きで、頭どころか身体ごとずぶずぶ入り込んでくる人物と言えば、ランスロットの同僚の中では一人しかいない。
「ポロロンさんか」
デュラックは眠っているのか起きているのかわからない、父の同僚のことを未だ名前を覚えられなかった。
「そろそろ名前を憶えてやってくれ、彼奴も悲しがっていたぞ。……本当か？」
「僕はマシュに嫌われたくない」
「それは私も一緒だ。だがな、息子よ。その言い方だと知っていることを教えているようなものだ」
ばちばち、と父と息子の視線の間にほとばしる視線が交差し、互いを突き刺すものとなる。
ランスロットが立ち上がると、高身長のデュラック以上に背が高いので必然的にデュラックが見上げることになるのだが、本人は気にしない。
そのとき、扉が開いた。
「ただいま帰りました、兄さん。今日のおやつはケーキにしましょう。兄さんが好きな――――」
マシュが笑顔を浮かべながら、ケーキの入った箱を手に玄関に入ってくるが、兄と父を見比べる。
「おかえり、マシュ。僕の好きなケーキだって？楽しみだなあ、紅茶淹

れるよ」
デュラックはマシュの鞄をさっと預かりに行き、リビングへと連れて行こうとする。
その間、余計なことを言ってくれるなよ、と父の方を見ていたが、嫌な予感ほどよく当たるものだ。
「マシュ、好きな人がいるというのは本当なのか？」
予感、的中。
マシュの視線がデュラックの方を向いているのを肌で感じる、キッと睨まれているのだろうと思うと、そちらのほうを怖くて見ることができない。
キリエライト家の今日の天気は、晴れのち嵐の模様。